

成果

地道な調査がもたらした成果は、報告書で
なつて後世に伝えられる。

文字が刻まれているものや、像などの掘り込みがあるもので、だれでも自由に見ることのできる石仏・石造物が調査の対象だ。所在地をはじめ、形状、大きさ、刻まれている文字などを記録する作業を繰り返す。歴史の専門知識は必要ない。ありのままを調査票に記入するだけだ。

山手地区では平成19年に492基を、清音地区は平成20年に488基の調査結果を報告書にまとめている。昭和地区では昨年6月から今年9月まで、本調査と追加調査に1年以上をかけた、1306基を確認した。現在、報告書の編集が最終段階を迎えている。



代表的な
石仏・石造物

信仰の対象としてまつられ、
生活のなかで息づいていた。



地藏
あらゆる願いを
庶民がかけた

最もよく見かけるものの一つ。江戸時代以降、あらゆる庶民の願いをかなえてくれるのが地藏となり、いば地藏など、各種の地藏が建立され、信仰された。峠や道端などに建つものは、道しるべにもなっていた。

特集 石仏・石造物調査



地神
農業の神
豊作の祈願を

地神は農地、農業の神で江戸時代中期以降、県内の各集落ごとに地神碑が建立されるようになった。春秋の彼岸のころに集落の人が集まり、お神酒や供え物をして豊作祈願や豊作感謝をして拜んでいた。



観音菩薩
ミニ霊場として建立
庶民が信仰

地藏とともに、良く見かける石仏。山手や清音地区の調査では、西国三十三観音霊場や、四国八十八カ所のミニ霊場として建立され、信仰されたものが多く確認された。



灯ろう
金毘羅信仰を
今に伝えるものも

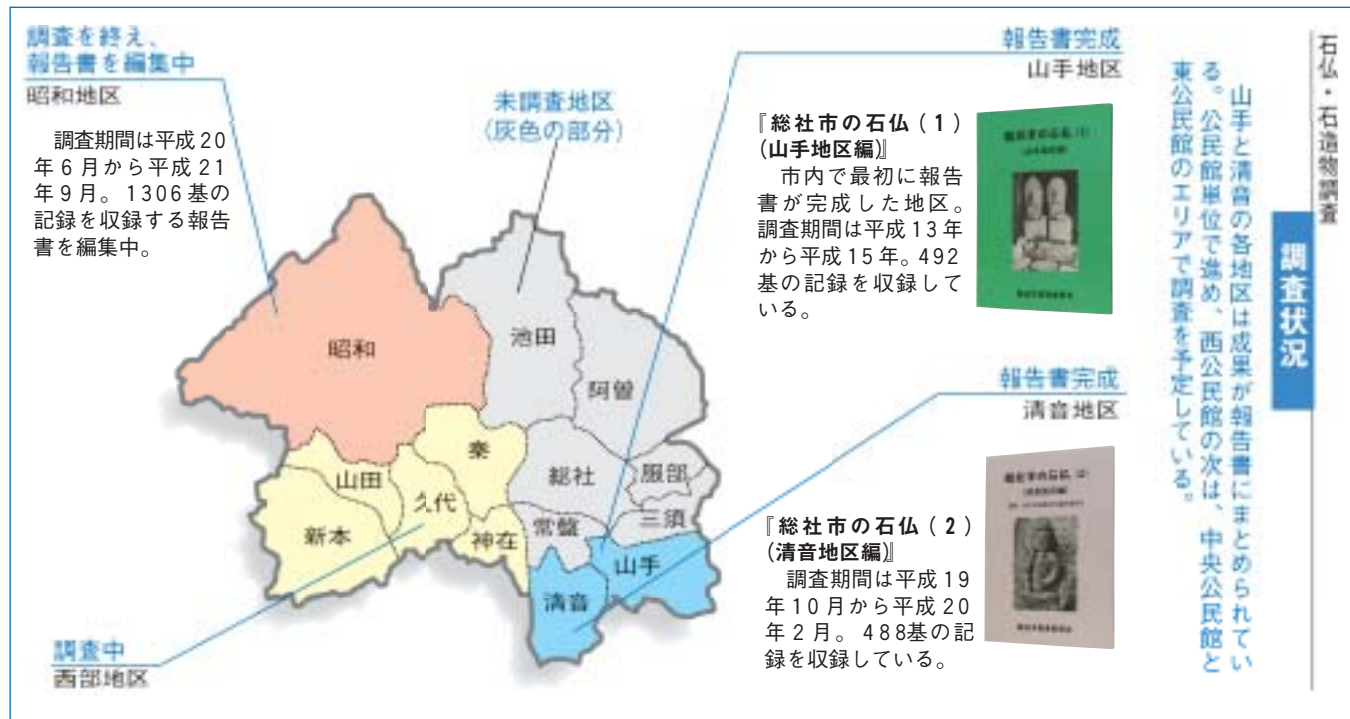
寺院や神社の常夜灯として寄進されて建立されたものが多い。前面に「金」[金毘羅宮]と刻まれているものは、江戸末期に金毘羅信仰が盛んであったことを今に伝える。



手洗石
寺院、神社で
身をきよめる

手水鉢や水鉢、たらい石、水盤などとも呼ばれ、寺院や神社に参拝したとき、この水で口をすすぎ、手を洗って身をきよめる。自然石を彫り込んだものが多く、形は角型や円型、舟型などさまざま。

農業の神、信仰の対象として守られてきた



2,286基を確認

—山手・清音・昭和地区の調査から—

になる。建立された時代も江戸初期から現代までと幅広い。これらは、多くの人の地道な作業の積み重ねによる成果だ。「同じ場所に何日も通った」と話す調査員もいた。

今、調査が進んでいるのは、秦・神在・久代・山田・新本の川西地区。「この地区だけで、2000基はあるのでは」と、立石さんは推測する。

「こりゃー、たいへんじゃ」。秦地区では、調査員を増員して調査に臨もうと8月13日、立石さんを講師に呼び、調査講習会を開いた。農繁期が過ぎた11月中旬以降、約30人が4地区に分かれて調査を進めている。ある調査員は、「うちらは、まとまりがよい。それが力になっている」と話す。

